

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「「もの」の人類学的研究(2) (人間／非人間のダイナミクス)」(平成26年度第2回研究会)

日時：平成26年11月9日(日曜日)午後14時より19時

場所：AA 研306室等

司会：床呂郁哉(AA 研所員)

報告者1：久保明教(AA 研共同研究員、一橋大学大学院社会学研究科)

報告者2：金子守恵(AA 研共同研究員、京都大学)

概要：当日は上記2名による研究報告と、それぞれの報告に続いて質疑応答が実施された。その内容は以下の通りである。

まず久保は「非近代論的モノ研究の可能性——将棋電王戦における棋士とソフトの相互作用をめぐって」と題して報告を行った。その概要は以下の通りである。

本発表では将棋電王戦における棋士とソフトの相互作用を検討することを通じて、Bruno Latour らの ANT (アクターネットワーク論) が提唱してきた非近代論的発想にもとづく人類学的モノ研究を構想し、その可能性について考察した。

Latour は、近代的な知や制度が、<人間／非人間>、<主体／客体>、<社会／自然>などの対句によって表される二つの領域に属する存在を絶えず互いに「翻訳」しながら両者がまざりあったハイブリッドな存在を増殖させる一方で、それらの存在を捨象して二つの領域を完全に別個のものとして純化することで発展してきたと論じた上で、近代的論者が前提とする純化に基づく自然／社会の非対称的に捉える分析視角(世界のあり方は客観的で機械的な力や法則によって規定され説明される／世界のあり方は人間の解釈や意味づけを通じて構築され説明される)を否定し、両者を横断して様々なアクターが互いに互いを翻訳しあいながら織り成す関係性に注目する非近代論的な見地を提示した。

本発表では、まず、将棋電王をめぐる将棋ファン等の見解にも——ソフト寄りの見方(論

理的な計算をまちがえないソフトに人間が勝てるはずがない」と棋士寄りの見方（正解の分からない局面を鍛えられた直観（「大局観」）で捉える力を持つ棋士がソフトに負けるわけがない）の対立というかたちで——自然と社会の非対称的な把握が見られることを指摘した。これに対して、実際の電王戦の対局においては、棋士とソフトの行為が互いに互いの視点から理解され、相互に翻訳されながら事態が進行していくという状況が見られた。本発表では、こうした齟齬を伴う相互翻訳を通じて両者の行為が対称的に捉えられていく過程を具体的な対局の展開に即して記述した上で、電王戦をきっかけにソフトと棋士の相互翻訳が進むなかで現代将棋のあり方が大きく変容しつつあることを指摘した。

さらに、発表者が日本人工知能学会の学会誌（2014年9月号、特集「人工知能が浸透する社会を考える」）に寄稿した論文「人間と機械の不調和に満ちた未来に向けて——将棋電王戦から考える」において、寄稿を依頼した人工知能研究者と人類学者である発表者との間で「世界のあり方は客観的で機械的な力や法則によって規定され説明される」という立場と「世界のあり方は人間の解釈や意味づけを通じて構築され説明される」という立場の対立が再び現れ、こうした非対称的な把握を乗り越えるために、人間の解釈にもソフトの論理計算にも還元できない両者の相互作用を対称的に把握するための中間的な分析概念として「実践的フレーム問題」と「記号離床問題」という二つの概念を案出したことを紹介した。以上の議論を踏まえた上で、非近代論的発想に基づく「モノ」の人類学的研究に向けて以下三つの指針が立てられることを示した。第一に、人間のふるまいをモノの視点からモノのふるまいを人間の視点から記述することで両者の相互翻訳を進める対称的な記述を行い、それを通じて人間的領域に依拠する人類学的説明とモノに依拠する科学的説明の依って立つ前提を相対化しつつ両者を接続し再編成しながら自然的／社会的要素を対称的に捉えうる分析概念を練り上げること、第二に自然／社会の非対称性に基づいて把握されてきた領域に近代的な純化では捉えきれない現象を見出し、既存の専門領域間の対話や連携を促進しながら新たな説明対象領域を構成すること、第三に、異分野対話を通じた対称的分析は、学問的な知と専門外の一般的な読者／受容層との関係（学問の実定性）の再編成と連動して促進されることである。

以上の報告に続いて、「もの」と人間を研究する際の対称性の論点などをめぐって質疑応答が実施された。

二番目の報告者である金子は「これはゴミか？：エチオピア西南部におけるエンセーテ、土器、学校のノートのあつかわれ方」と題して報告を行った。同発表の目的は、「ゴミ（*qoshasha*, ቆሽሻ アムハラ語）」という用語に注目しながら、エンセーテや土器のライフサイクルにおけるアリの人々の行動を「知る *esukan*」という用語に注目して検討したうえで、使い古された授業ノートのとりあつかわれ方を検討し、家のなかにそれらが山積している状況を把握することである。それをふまえて人、身体、環境、「もの」の相互間の関係について展望する。この発表のもとになる調査は、1999年11月～2001年3月、2012年7月、2013年3月、2013年12月～2014年2月のあいだに、エチオピア西南部に暮らす定住的農

耕民アリの人々を対象におこなった。そのなかでも、エンセーテを数多く栽培している D 村を拠点にして、世帯 A（夫婦と子ども 6 人）で生産されるエンセーテ発酵デンプン量の計測をおこなった。また土器成形については、G と S という 2 つの村に暮らす 19 人の土器職人（うち未婚女性 12 人、既婚女性 7 人）の作業を参与観察した。さらに、J 町の学生寮に寄宿する 47 人の学生に対してインタビュー調査をおこなった。

エンセーテのライフサイクルについて検討したところ、以下の点があきらかになった。

(1) アリの人々がエンセーテを栽培、消費することにより、エンセーテの生活環が中断され（野生種より）短くなっている。そのなかでゴミ (*koshasha*) に相当する状態になる「もの」はあらわれない。(2) アリの人々の社会化は、エンセーテの生活環の中断の過程を「知る」とことと関連づけられている。(3) アリの人々は、数多くの品種を栽培することを「よきこと (*wanna*)」にとらえている。アリの人々は、畑でみつけた種子繁殖した個体を残すなど、目的的に品種を植え付けしているのではなく、多くの品種があることをよきことと考える追加的傾向性 (重田 2014: 248) のもとにエンセーテのライフサイクルにかかわっていた。(4) エンセーテの品種は、人々に日常生活の記憶を想起させる役割を担っている。(5) 学生たちはエンセーテ栽培を「知って」いるが、実際に自分の畑で栽培している割合は少ない。(6) エンセーテの発酵デンプンは、自給的に消費される傾向がある一方、一定の割合で市場へも出荷される。エンセーテ発酵デンプンやそのパンを介して加工した女性とそれを購入する客のあいだに一对一の盟友的な関係 (*jaala*) がむすばれる。

土器のライフサイクルについて検討したところ、以下の点があきらかになった。(1) 土器の壊れ方に応じて人びとが絶えずあらたな機能や役割を付与し続けており、人々の関与の仕方によって、ゴミとして位置づけられることなく砂になるまで使い尽くされる。(2) 職人の身体動作（手指の動かし方）と粘土（素材）との対応を基盤にして、土器づくりにおける行動連鎖が確立されており、それが土器づくりを「知る」ことの中核になっている。(3) 土器の耐久性の基準は、土器を成形する行動連鎖と土器を利用する行動連鎖の組み合わせでまざる (*wanna/dakari* をもちいて表現)。(4) 職人が行動の連鎖を確立し、それに基づいて利用者との関係が築かれる。土器のかたちは、その関係性を基盤にしてたえず創りだされる。

エンセーテと土器のライフサイクルを検討すると、その過程でアリの人々にとってのゴミ (*koshasha*) はあらわれてこない。その背景のひとつに、アリの人びとの「知る」という行動が、エンセーテの行動と相互作用しながら確立されたり、粘土と手指の対応を基盤にして確立されていることを指摘できる。その一方で、アリの人びとは、授業ノートがゴミ (*koshasha*) なのかどうかを判断することができないようにみえる。知る *esukan* (=経験) ではなく見る *shedinkan* ことを基準にした知の実践に *wannna/dakari* (よい/悪い) 概念を対応させることはむずかしい。山積されたノートはこのあらわれと考えられた。

エンセーテや土器は、限られた地域内でそのライフサイクルを完結する。ノートも含めるとそれぞれの「もの」の物質としての特性は異なっている。だが、それぞれの「もの」

の物理的な動きのなかで、「知る *esukan*」という行動に注目すると、身体を介した人-「もの」関係、「もの」を介した人-人関係、「もの」や身体を介した人-環境の関係をえがきだすことが可能になる。*wannna/dakari* (よい/悪い) という表現は、アリの人々が出来事を評価する際の固定的な参照枠ではなく、それぞれの関係性に応じてもちいられる。*wannna/dakari* (よい/悪い) という表現とそれにかかわる関係性を検討することは「もの」や身体が拡張されている程度を理解する際に重要であると考えられる。

(参照文献：重田真義 2014 「在来農業」『アフリカ社会を学ぶ人のために』世界思想社 240-253.)

以上の報告に対してメンバーからは、そもそも「ゴミ」という概念をめぐる研究者の有する分析概念を対象社会に適用する際の妥当性などをめぐって活発な議論が行われた。

以上。